

郡山城下町散歩

薬園八幡神社と薬園宮

矢田筋の薬園八幡は、地元では「やこうさん」と呼ばれ、親しまれているが、その歴史は郡山町中の神社の中では特に古く、郡山の古代の姿にさかのぼる。

続日本紀の天平勝宝元年（749）の11月に、『南薬園の新宮に大嘗す』の記事が見える。この「南薬園の新宮」は郡山市の北の外れの、朝廷の薬草園があったところで、そこで聖武天皇の娘さんの孝謙天皇が大嘗祭を催したというのだ。その後、薬草園の辺りは聖武天皇が崩御のとき東大寺に寄進され、平安時代中期には「薬園庄」と呼ばれていた。薬園八幡はおそらく薬園庄の鎮守の神社で、古代にそこに薬園が広がっていた名残り、あるいは孝謙天皇の「薬園宮」の名残りかもしれない。



本殿は、一間社隅木入春日造り（檜皮葺）。建物の隅から斜めに庇を支える隅木がつけられたもので、桃山様式の流れをくみ、江戸時代初期の再建とされる。主殿の襖絵は江戸時代の狩野派の画家・藤田常栄の作、また主殿内部の36歌仙の図額は全部揃っており、小野小町は正面を向いた珍しい構図といわれる。

神社の前の道は矢田筋と呼ばれ、地藏信仰の矢田寺に続いている。

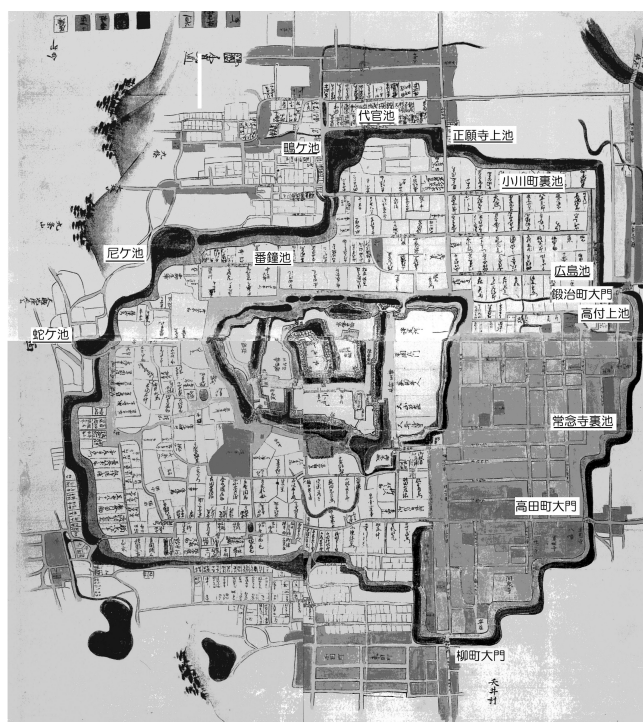
外堀公園、総構え外堀のこと

郡山は、豊臣秀長によって造られた総構えの町で、いわば町全体を要塞として、町の一番外側には町全体を守るために外堀が巡らされた。外堀は総延長5.5キロ、幅は平均12m前後、外堀の内側には高さ5mほどのお土居が続き、外側からは城下町が見えないようになっていた。

外堀は全てが掘られたわけではなく、元の池や川も利用されている。一番有名なのは秋篠川の利用で、元々、秋篠川は郡山の町中にあたることを流れていたが、そこを外堀に利用した。秋篠川は薬師寺の南で直角に東に向かい、佐保川に流れているがその時に付け替えられたものだ。

郡山城総構えが完成するのは、関が原の4年前の1596年こと、当時城下には10万人の人間が居たというが、徳川家康との対決が現実の驚異となってきた頃だったのだろう。

関が原のあとも、外堀とお土居は壊されることなく幕末まで郡山の町とともに生き続けた。



外堀で造られた町の形は江戸時代250年を通じて変わることはなかった。城下町は外堀によって守られ、外への出入のために何箇所かの出入り口が設けられ、常に役人が出入りの人間を見張っていた。不思議なことに、戦国時代の終りに戦争のために造られた構造物は、平和の時代の郡山の町とそこに暮らす人々を守り続けたのだ。

ところが明治以降の産業の発展は、郡山の町を大きくし、外堀はお土居と共に壊されていき、金魚池になり、病院になり、マンションになっていった。外堀公園は10年ほど前に、観光郡山の目玉として総工費26億円をかけて造られたものだが、もちろんこの書割のような時代劇風景は造られたもので、元々の外堀の素朴な風景を再現したものではない。

左は幕末の「和州郡山家中図」で色の濃い所が町方で真中が城、外堀はまだ綺麗に残っている。

源九郎稲荷

源九郎は狐の名前、名前のある狐はそうそう居ないから、それなりに不思議な話がある。

源義経、この若者は平家を滅ぼしたのはいいが、鎌倉の頼朝公と対立して追われることになる。時に義経が吉野に潜んで居た時、都に居た愛妾の静御前を守って義経の元に送り届けたのが一匹の白狐で、義経はこの狐の忠孝に感謝して「源九郎」の名前を与えた。

「——で、何でその源九郎狐がこの郡山に居られるか、時代が変わってこの郡山で百万石の領主となられたのが、戦国時代の豊臣秀長さん。この方はもちろん天下人秀吉の弟だが、豊臣家は尾張中村の百姓の出だから家の守護神、お城の守り神といったものは元から無い。

そこで、秀長さんが吉野に居た源九郎狐にお願いすると、今や老狐となった源九郎狐が羽織、袴で眷属を引き連れてお城へやってきて、お城の大広間で眷属とともに不思議な術を披露した。そして秀長さんに、『私をお城の巽のほうに祀れば、守護神になろう』と告げた。巽は東南の方角、かくして秀長公は現在地に一社を建立、源九郎狐を城の守り神としてお迎えしたという話——」

これが源九郎稲荷の創建伝承だが、本当は現在地に社殿が移されたのは元禄の頃。源九郎稲荷のある洞泉寺は遊郭の街で、静御前を守った源九郎狐は遊郭で働く遊女たちの守り神になったとか。今でも華やかさが伝わる神社は郡山の人気スポットの一つになっている。

ところで、源九郎稲荷は日本三大稲荷と称して、朱塗りの鳥居には扁額が掛けられているが、この扁額は昭和三十年台の売春防止法の施行で、洞泉寺界限が寂れたため、せめて神社だけでも賑やかにしようとした時の神主が仕掛けたとか、まあ、こういってはなんだが、日本三大〇〇なんてそんなものなのだ。



柳4丁目界限

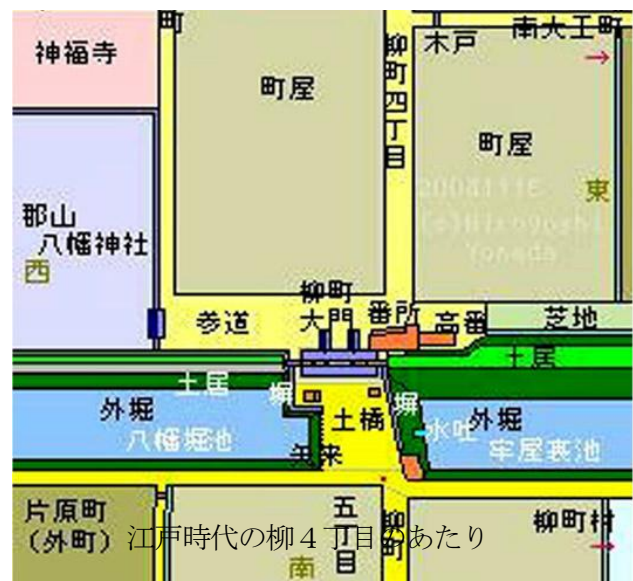
江戸時代から近代にかけて郡山は北和の交通の要衝として栄えた。中でも柳4丁目の交差点は、柳大門があった所で、城下町の南の玄関口。大門の周囲には、創業二百年以上で、大和中の娘さんがお嫁入りの時はここで婚礼衣装を調えたという「和田徳」呉服店や、同じく江戸時代から続く「花内屋」旅館など古い老舗の建物が残っている。

郡山八幡は、元は城の西にあった神社だが、城下町が建設されたときに豊臣秀長公によって当地に移され、郡山の町と柳の人々を守り続けてきた。社殿は幕末の地震のあと建て替えられ、歴史が浅いので何の史跡指定はうけていないが、当時の柳の町衆の勢いを感じさせる重厚な造りである。

柳の商店街の北の端には、創業四百年、秀吉の茶会に「うぐいす餅（城の口餅）」を献上したという「本家菊屋」がある。さすがに創業時の建物は倒壊して、今の店屋は建て替えられたものだが、安政年間の地震の時だから、150年以上も前の話だ。

郡山と柳の町が一番賑やかだったのは、おそらく大正10年前後、近鉄が西大寺から郡山まで延びてきた頃で、現在町の文化財になっている洞泉寺遊郭の川本邸や、ヨーロッパのハーフチンバー様式の杉山医院などはその頃建てられた。日本で最初のアーケードが、柳の商店街に設置されたのもその頃だ。

最近、この4丁目の金魚の電話ボックスが観光名所になった。公衆電話という何となく昭和のノスタルジアを感じさせる風景は、どんな骨董のような金魚鉢よりも心に安らぎを与えてくれるようである。



郡山城下町あれこれ

箱本十三町

1588年(天正16年)に、郡山城下町に13の町があったことが記されている。本町・魚塩町・堺町・柳町・今井町・綿町・藺町・奈良町・雑穀町・茶町・材木町・紺屋町・豆腐町がそれで、これらの町は秀長公から地子(年貢)免除の特権を与えられ、かわりに月当番で城下町の自治のための諸役を務めた。月当番にあたった町は、特権の記す朱印状を修めた御主印箱を町内の会所に置いて、「箱本」と染め抜いた木旗を立てる慣わしがあり、それが箱本十三町の始まりになった。

この箱本制度は江戸時代になっても踏襲される。町の数が増え続け、江戸時代中頃には地子免除の特権を持つ外堀内の町は27町に増えるが、草創期の町の数から「箱本13町」と呼ばれたのである。

木戸

城下町の町は、入り口に木戸が設けられ、通行人の監視をしていた。木戸は午前6時に開けられ、午後10時には一斉に閉められた。木戸には木戸番が居て町民が勤番することになっていた。事件が発生すると、拍子木や鐘を打って、次の木戸へ知らせ一斉に木戸を塞ぎ犯罪の捜索に協力していた。

木戸の構造は、太い2本の掘っ立柱の上方に貫を通してつなぎ、両柱の間に戸を入れた冠木門(かぶきもん)。外堀公園の北口に再現してある木戸は実物よりかなり大きい、これは現在の消防車が通れるためだ。



大門

木戸が各町毎の出入り口であったのに対して、大門は城下町全体の出入り口で3箇所的大门が設けられていた。柳4丁目にあった柳大門もその一つだ。

大門には、必ず辻番所が設けられ、厳重な警備体制をしいていた。また大門の内側には高札があり、公共の場所でもあった。大門は朝の6時に開けられ、夜の8時には閉じられた。外堀公園の南門は実際にあった柳大門を再現したもので、高麗門という江戸時代に流行った形式の門で、特徴は門の大きさに対して屋根が小さい。これは室町期の門は低く大きな屋根で重厚さを尊んだのに対して、高麗門は門の下を見えやすくして、明るくしているためだといわれる。



高札場

高札は「たかふだ」とも読み、法度、控書、禁制などを書いて、公衆の目に触れやすい場所に立てた札で、時代劇でお馴染みの光景だが、郡山では3箇所的大门に設けられていた。掲げられていた高札は、人倫五常を守るべきこと、強訴徒党を禁ずること、切支丹宗門を禁ずることの「定三札」と、臨時の通達の「覚え札」があった。「定三札」は常に掲げられていたもので、このうち「人倫五常」とは君臣・父子・夫婦などの礼を説いたもの、すなわち儒教精神である。江戸時代の支配者は実に教育熱心な人たちで、人民に道徳を守らせることから、国の政策を始めていたのだ。

火見櫓

1680年、元禄の少し前だが、町家670軒や城下町の寺院を焼失し、城下町は多いに寂れた。この時の教訓から藩が指導して、城下町に4箇所の火見櫓が新設された。

ところが20年後の1699年にもまた大火があつて928軒の町家が焼け、この時は藩から千俵のお救い米が放出された。この米は家の間口の大きさによって分配された。ところが町民の半数以上を占める借家人は家がないので、間口の大きさによる米の割り当てはなかったが、人別帳に記載された人数で、赤子を含め一人あたり平等の割り当てで米を貰えた。江戸時代の行政は、災害救助に関してもキチンと事務的な手段を踏んで行なわれたのである。